

アミーゴ会だより

2014年7月
通巻第19号
季刊 2014-III

www.mex-jpn-amigo.org



発行人：上原尚剛
編集人：河嶋正之
鴻巣勝明
事務局：笠井道彦

メキシコ歴史文化講演会 2014：第1回報告

旅行記にみる最初期の日墨関係

成城大学非常勤講師 伊川健二

本稿は、支倉使節団一行のメキシコ^(註)到着 400 周年を祝して開催された、「メキシコ歴史文化講演会シリーズ」の初回「大航海時代のなかの支倉遣欧使節団」(5月8日、於：在京メキシコ大使館)を担当させていただいた際の内容の一部である。このような晴れやかな場面での発言の機会をご提供くださった関係各位には改めて謝意を申し上げる。

(注：歴史用語としては「ヌエバ・エスパーニャ」などと記載するべきであるが、ここではメキシコとする。)

16世紀中期：「レキオス」に漂着

日墨関係の起点は、一般に 1609 年にフィリピン前臨時総督ロドリゴ・デ・ビベロがメキシコへの帰途遭難し、岩和田(現在の千葉県御宿町)の人々が救助した時点におかれている。両国の友好関係を振り返る意味では相応しい出来事には違いないのであるが、記録の上ではもう少し遡及することができる。

1542 年 11 月にメキシコを出発したルイ・ロペス・デ・ビリャロボスの艦隊は、翌年 2 月にミンダナオ島に到着するものの、メキシコへの帰還に失敗し、45 年、香料諸島でポルトガルに投降した。艦隊商務員のガルシア・デ・エスカランテ・アルバラドによる報告が、スペイン・セビーリャのインディアス総合文書館に架蔵されている。そのなかに「レキオス」に関するものがある。「レキオス」は、少なくとも逐語訳的には琉球であると理解されている。彼らが香料諸島で得た情報によると、このころポルトガル商人たちがシャム(タイ)から中国を目指して航行した際に、レキオスへ漂着したことがあるとされる。

16世紀後期：「アルモニカス」を発見

その後、ミゲル・ロペス・デ・レガスピがマニラに拠点を築き、日本を含むアジア情報は具体性を増していくが、まとまった分量の旅行記はしばらく確認できない。

そのなかでとりわけ注目に値するのは、フランシスコ・ガーレの記録であろう(右図参照)。ガーレの航海については、古くは岡本良知氏が 1936 年に該当記事をほとんど完訳に近い形で紹介をしながら、学界も含めてほとんど認知されていない。彼らの航海については、ポルトガルの著名な歴史書ディオゴ・ド・コウト『アジア 10 年記』から知ることができる。

ガーレの艦隊は 1582 年 3 月 12 日にアカプルコを出発し、盗賊諸島・フィリピンを経て、マカオへ到着する。84 年 7 月 24 日、マカオを出発し、澎湖・台湾・琉球の近海を通過し、日本列島の東の海上と思しき場所です島を発見し、アルモニカスと名付けたとされる。この島の人々は中国や琉球とは異なる言語を話し、金を産出するという。<次頁へ>



DECADA X. CAP. III. 493

CAPITULO III.

De como Francisco Gale foi por ordem de ElRey descobrir a Costa da nova Hespanha de 40. graus para cima: e da derrota que levou desde o porto de Aca-pulco até Japão, e dahi até tornar ao mesmo porto.

Porque não he fóra da nossa historia, e conquista a viagem que fez Francisco Gale por ordem de ElRey, em que gastou tres annos, daremos aqui razão della conforme a relação que elle mesmo mandou de toda ella ao Viso-Rey de nova Hespanha, a qual nos veio ter á mão: pelo que se ha de saber (segundo nos differam) que querendo ElRey D. Filippe descobrir por aquella costa adiante de quarenta grãos para cima tudo o que pudesse, para ver se era verdade o haver algum canal por cima da Tartaria, que passasse até ao mar Septentrional, e creveo ao Viso-Rey da nova Hespanha que mandasse áquelle negocio peffoas expertas, que trabalhassent descobrir o que tanto desejava, e sobre o que tantos já trabalháram, como foi João Gaboto, Piloto Inglez, homem famoso em seu officio, o qual considerando que não havia a terra de ser tão fechada, que não deixasse passagem

目次

1.第1回講演会報告:「旅行記にみる最初期の日墨関係」	伊川健二	... 1
2.第2回講演会報告:「私の先祖は日本のサムライだった」	太田尚樹	... 3
3.私とメキシコ:日墨学生会議報告「“そのまま”幸せに気づく」	丸田理乃	...5
4.私とメキシコ:セルバンテール参加報告「Viva メキシコで日本を踊った」	五條珠雀	...7
5.メキシコへの誘い:「レフォルマに並ぶ歴史 その4」	メキシコ観光(メキシコ)	...8
6.群仙園の近況...6/ お知らせ:Fiesta Mexicana お台場...6/藝0座 8月公演...9/ あとがき		...9

17世紀初頭:ドン・ロドリゴの御宿漂着

さて、いよいよ冒頭に述べたビベロの出番である。メキシコに生まれたビベロは、マニラでの臨時総督としての任務を終え、メキシコへ帰る途中、1609年9月30日、暴風雨のため岩和田へ漂着した。

彼が残した記録はロンドンの大英図書館とマドリードの王立歴史学士院に架蔵され、『日本見聞録』としてしばしば邦訳もされている。そこには漂流から岩和田への上陸、江戸の人口が15万人であるなどの町の状況、京都の方広寺大仏殿の様子、さらには人口20万人の大坂から海路豊後を目指したことなどを述べたのち、徳川家康との交渉内容を書き留めている。

家康はビベロに対し、50人の鉱夫の派遣などを求め、ビベロも日本における鉱山の利益配分、オランダ人の追放、マニラ政庁への支援、布教の自由などを求めた。このなかでオランダ人の追放については、家康との合意を得るには至らなかった模様である。

漂着からほぼ1年を経た1610年8月10日、浦賀から帰国の途に就き、家康および秀忠の書簡を携えたアロンソ・ムニョスが同行した。ムニョスがスペインから日本へ戻り、家康の通商要請に回答する可能性も検討されたが、少なくとも表向きは彼の病気により実現をみなかった。

17世紀初頭:ビスカイノの来日

ビベロ送還に謝意を表すために来日したが、『金銀島探検報告』で知られるセバスティアン・ビスカイノである。同報告はスペイン国立図書館に保存され、その筆者はビスカイノ本人ではなく書記であるとされている。

ビスカイノは、使節の命を帯び、メキシコ市からアカプルコへ向った。1611年3月22日に同地を解纜し、盗賊諸島近海を通過し、6月9日に常陸の久慈浜に到着、さらに浦賀へ回航した。江戸で秀忠と、駿府で家康と会見し、貿易・測量許可などを求め、測量許可については容認されたとしている。

測量の旅は東日本からはじまり、日光街道を経て、米沢・仙台へ至り、仙台では伊達政宗と会見する。仙台ならびに江戸における一行と政宗との邂逅が、支倉使節派遣へ至る契機のひとつとなったことはよく知られるところだろう。その後、伊達領を探索しつつ、遠く南部領・松前領の情報をも入手する。蝦夷地の情報については、1618年から21年にかけてジェロニモ・デ・アンジェリスおよびディオゴ・カルヴァーリオが送信した報告が知られているが、それに先行する。西日本は堺まで測量の旅を続け、浦賀へ戻り、金銀島探索の旅に出帆する。

『金銀島探検報告』には、先述フランシスコ・ガレーの記録への言及はないものの、その影響を想像することができる。結局、金銀島発見には至らず、かつメキシコへの帰還も不可能と判断され、浦賀へ戻る。最終的には支倉使節団とともに、1613年10月28日(記録上は27日と理解しうる)に月浦を出発した。

支倉使節の行程については、シピオーネ・アマテイ『伊達政宗遣欧使節記』やその他の史料が饒舌に物語るところであるが、その詳細は講演会シリーズの他の諸先生方が余すところなく論じてくださることと確信して、本稿はこのあたりにて擱筆としたい。
<了>

【編集部注：メキシコ歴史文化講演会 2014「メキシコと支倉常長遣欧使節団～支倉使節団派遣 400周年・日墨交流年記念～」は、メキシコ・日本アミーゴ会が、支倉使節団派遣 400周年および日墨交流年の記念行事の一つとして、17世紀の日本とメキシコ(ヌエバ・エスパニア)およびスペインとの関係についてさらに理解を深めるために、日本有数の専門研究者を招いて全4回の講演会を企画しメキシコ大使館のご協力を得て開催中です。本号では第1回と第2回の講師のご寄稿を掲載します。第3回および第4回の講演会については次号に掲載予定です。全4回の概要は下記別項を参照ください。会場はメキシコ大使館別館5階“Espacio Mexicano”】



☆メキシコ歴史文化講演会 2014の概要☆

第1回講演会：5月8日(木)

テーマ：「大航海時代のなかの支倉遣欧使節団
～日本とアジア(フィリピン)・新大陸(メキシコ)関係の創成期～
講師：伊川 健二 成城大学ほか非常勤講師

第2回講演会：6月5日(木)

テーマ：「私の先祖は日本のサムライだった」
～400年前、ヨーロッパに消えたサムライたちは生きていた！～
講師：太田 尚樹 東海大学名誉教授

第3回講演会：7月4日(金) 18:30～20:30

テーマ：「チマルパインの『日記』と支倉使節団」
講師：井上幸孝 専修大学文学部准教授

第4回講演会：8月8日(金) 18:30～20:30

テーマ：「メキシコの美術史に見る日本」
～支倉常長使節団と聖フェリーペ・デ・ヘスス～
講師：川田玲子 愛知県立大学外国語学部非常勤講師



(太田尚樹『支倉常長慶長遣欧使節』より転載)

「私の先祖は日本のサムライだった」

～400年前海を渡った慶長遣欧使節の意外な話～

東海大学名誉教授 太田尚樹

“中堅官僚” 支倉大使の任務

昨年伊達政宗が慶長十八年（1613）、スペインとローマに外交使節を送り出して400年の節目の年に当たり、スペインに到着したのは今年で400年ということになります。また、使節が持ち帰った大使支倉常長の肖像画はじめ、慶長遣欧使節関係の資料が昨年6月「世界記憶遺産」に登録されたことは、記憶に新しいところです。

じつは伊達政宗が使節を送り出す2年前、東北地方は大きな地震と津波の被害に遭っていました。すべて伊達領内です。ということは、3年前の東北大地震から遡ること400年前だったことは、物理的にも因果関係があるのかもしれませんが。

そこで領内の経済立て直しのため、政宗はスペインの植民地メキシコと交易することを思い付きますが、さらに飛躍して、仙台藩とスペインとの国交樹立まで考えていました。キリスト教世界最強国家が伊達藩の背後につき、仙台湾にスペイン船が頻繁に出入りすれば、幕府も手を出せない、つまり天下に潰されない、地方の独立性の主張です。

なかには明治時代の末に東大の箕作という先生が、政宗は討幕まで考えていたのではないか、という説を立てたこともあります。それはなかったのではないかと私は思います。それでもスペイン国王フェリペ三世との交渉では、大使支倉常長は通訳のソテロ神父以外には部下も傍に寄せつけなかったことは、たしかにクサイ話です。スペイン側に残る記録には、支倉の口から「わが領土を国王陛下に献上いたします」と言わせているところを見ると、政宗は討幕も心の隅にあった可能性は考えられますが、政宗の心づもりは相手の反応を見るためだったのでしょう。

そこで政宗は使節の大使の人選に当たって、重臣のなかからではなく、禄高600石の目立たない中堅どころの侍支倉六衛門常長を抜擢します。

明治維新を成し遂げた幕末の志士は地方の下級武士たちでしたが、「二流の人間の方が全体を見ることができ、大を成し遂げる」のたとえ通り、支倉を選んだ政宗は、独特の発想と眼力の持ち主だったようです。

過ぎし日に秀吉の朝鮮出兵の折、支倉は政宗に従って釜山に上陸し、足軽20人を指揮して戦っています。現在の感覚ではせいぜい小隊長クラスですが、支倉の力量が頼もしく映ったはずです。



政宗は自前の黒船「サンファン・パウテイスタ号」を建造し、支倉一行をまずメキシコのアカプ



ルコへ送り出しました。船出したのは石巻の北方にある小鯛島ですが、牡鹿半島を左舷側に見て金華山沖に出ると、そこから黒潮が東に流れ、偏西風を利用しながらの航海です。伊達の領土・領海は、アメリカ大陸への玄関口であることを政宗は知り、それが船を仕立て使節を送り出す発想に繋がったとみられます。

偶然ですが、学生時代に私たちの乗り組んだ東京水産大学（現東京海洋大学）の練習船海鷹丸も、彼らと同じアカプルコを目指していましたから、支倉一行には関心を持ちました。

のちにアメリカとスペインの大学に留学中、私は一行の足跡を訪ねる旅を少しづつ始めました。と言っても本格的に取り込んだのは、20年前からです。

使節団の足跡をたどる

日本人26人と、日本から帰って行くスペイン人神父5人からなる一行はアカプルコから陸路メキシコ・シティー、ベラクルスを経て、スペインの軍艦で大西洋を渡り、セビリアの川下12キロのコリア・デル・リオという町に上陸します。帰途もここから船出しますが、9人が残留し、今、彼らの子孫といわれる人たちが住んでいるのも、この町です。望郷の川岸の町ということになりますが、昨年、その船着き場に日本の皇太子殿下が桜の木を植えたことがニュースになりました。



一行はセビリアを経てマドリッドに八ヵ月滞在しますが、国交樹立の交渉は旨くいきませんでした。日本で起きているキリシタン迫害の嵐の情報が、イエズス会から寄せられていたのです。

その間、支倉大使が国王や名だたるスペインの指導者臨席のもとに、洗礼を受けた修道院や、若い侍たちが彷徨った歓楽街なども、マドリッドにはそのまま残っています。私も5年間の滞在中、飲み歩いた青春の地が、まったく同じ場所だったのは奇遇でした。

その後、彼らは法王の権威にすがるために、ローマに上ります。陸路バルセロナに出たからジェノバ船籍の船に乗り、地中海を東へ旅しますが、南仏のサン・トロペで嵐に遭い、地元の侯爵未亡人宅に二泊します。このとき記した彼女の日記によりますと、フランス語(当時の古仏語)を話す地元の人たちと、侍たちの話すスペイン語で、会話が成立したこと、みんなが持参したハシを使い、支倉大使が食事するときは、刀を奉げもった小姓が背後に控えていたと記されていますから、日本の身分制度や武家社会の習慣を、現地でも守っていたことがわかります。彼らは地元民の求めに応じて刀を抜いてみせたり、懐から紙を出して鼻をかんで捨てると大人も子供も競って拾い集めている姿を見て、ゲラゲラ笑っていたそうです。中には茶目っ気を出して、わざと鼻をかんで捨てている侍もいたと記されていますが、何とも生き生きとした光景です。

“国際人”支倉大使の成長ぶり

ローマに着いた一行は、羽織袴に帯刀姿で、パレードをしています。法王の白馬にまたがった支倉は、白っぽい上下の絹の陣羽織を羽織り、イタリア風のつばの広い帽子を取って、にこやかに会釈しながら、沿道のローマ市民の歓呼に答えていたと記録には書かれています。派手な仕草を好まない日本の侍、それも地味一徹な支倉六右衛門が、永遠の都ローマの青空の下で繰り広げられているヴァチカン王国の大絵巻に、うれしさのあまり思わず出た精一杯のゼスチャーだったようです。あの田舎侍が、世界の檜舞台を華麗に演じるビッグ・スターになっていたわけで、国際人として成長した姿が読み取れます。

後日、法王に謁見した折には、ずーずー弁のまま原稿も見ずに演説しましたが、法王はじめ並み居る枢機卿、式部官たちが彼の堂々とした作法と迫力に、“参ってしまった、そうです。それでも俗界のことには関与しない法王は、「スペイン国王との交渉は、もう一度現地でするように」という言葉に留めてしまいました。



復元されたサン・ファン・パウティスタ号
(宮城県歴史館船ミュージアムに展示)
世界記憶遺産に登録された支倉常長像(国宝、仙台市博物館蔵)

一行はまたスペインに戻りましたが、さらに日本からキリスト教布教禁止の悪い情報が入り、国王との交渉はもうできませんでした。

“武士道の権化” 支倉大使の評価

彼らはセビリヤ郊外に戻り、二年以上、国王の返書を待っていたところ、「マニラで返書を待て」の指示で、仕方なく帰国していきます。マニラで返書を受け取ったか否かは不明ですが、じつはこの原稿を今マニラで書いています。何か一行の手掛かりが国立公文書館にないか、探しているところなのです。

石巻を出帆して七年後、一行は日本に帰還を果たしましたが、受洗した支倉は蟄居を命じられ、歴史の舞台から消えていきます。最も難しい時代に、聖と俗の狭間を誠実に生きた日本人というのが、彼の評価でしょう。誰を恨むこともなく、人に西洋を語ることもなく、去って行くその後姿に遺した美しさと哀愁もまた、武士道そのものです。

それでも東洋の不思議な国ジパングでしかなかった日本と伝統の武士道を、世界の都でアピールできたことは特筆に値します。



コリア・デル・リオ (スペイン)

コリア・デル・リオの日本人たち

Somos japoneses!
(私たちは日本人!)



コリアに広がる水田

コリアの礼拝堂・エルミータ



(ロンキーヨ・ハボン氏)

(マヌエル・ルイス・ハボン氏)

そして9人の日本人がコリア・デル・リオに残りますが、その末裔が今も、“somos japoneses” (我々は日本人だ) といっている姿を見ると、まさに“事実は小説よりも奇なり”。私は25年前からハボン姓の彼らと交流を続けていますが、不思議な縁を感じています。

(2014年6月22日記)

【編集部注：講師の写真は編集子撮影。ハボン氏二人の写真は太田講師撮影。その他の図は講師著『支倉常長遣欧使節 もう一つの遺産—その旅路と日本姓スペイン人たち—』(山川出版社、2013年8月)より抜粋転載。】

“そのまま”の幸せに気づく

～日本メキシコ学生会議の活動報告～

日本メキシコ学生会議

JaM Youth Change 代表 丸田理乃

はじめまして。私たち、JaM Youth Change は2013年に創立した日墨青年国際協力を目的とした国際青年団体です。活動初年度となった昨2013年は、三度の講演会(事前勉強会)と、一度のメキシコ渡航、年度末の活動報告会を以てその活動を終わりました。講演会では、JICA様、JETRO様、そして早稲田大学からメキシコに精通したプロの所長・職員・教授を招き、歴史・文化・社会・経済など、様々な分野に渡ってご講演していただきました。多数の社会人や学生の参加者とともにJaMのメンバーもメキシコについての知見を深め、意見交換を通じて日墨交流の意義の共有に努めました。



メキシコでの交流活動

活動のメインである渡航においては国際交流基金様からご後援をいただき、現地メキシコシティで充実した国際交流を行いました。

まず、社会的な国際交流の面では、スペイン語圏最大のテレビ局 Televisa でのデビューを皮切りに、Centro de Cultura Japonesa (メキシコ日本文化センター)の所長、藤原さんと会談し、UNAM High School

ではキングス校長と200人を超えるメキシコの学生たちが伝統的なダンス、料理とともに



日本からの来訪を暖かく祝福してくれました。

次に、文化的な国際交流の面では、UNAM Universityの現地学生からラテンサルサのダンスレッスンを受け、パーティでは本場のテキーラ、コロナ、メキシコ音楽を味わったりと、日本では今まで触れることのなかったメキシコ文化を肌で感じる事ができて、メンバー一同一層視野が広がったとともにメキシコのが大好きになりました。

三つ目に経済発展的な視点においては、メキシコは将来の先進国としてその発展を有望視されている一方、初等教育面の格差、都市部以外での治安の状況などは

日本とは異なり非常に由々しき事態であることを現地の方々の話を聴いて痛感しました。



“そのまま”を前にして

このように、今回の交流を通じて一言では語りつくせない経験をしたのですが、そんな中で、最も印象深く心に残っている経験は、最終日にテポストラン国立公園で絶景を見たときです。山頂のピラミッドからの筆舌に尽くし難い美しい景色を目の前にして、メンバーは皆心が洗練される思いでした。そして景色を見ていて次のように感じました。

伝統的な家屋やマーケットの周りは所々、鬱蒼とした木々で埋め尽くされています。メキシコは決して発展の遅れた国ではありませんが、恐らく日本なら木々を伐採してぎっしりとビルや住宅街を建設するであろう場所に、彼らはあえて手を加えていないのだ、と。彼らにとっては“そのまま”で十分に幸せなのです。そんな風に考えていると、国際機関や国際協力の存在意義について、改めて深く考えさせられました。先進国の価値観の上に立脚した“モノに溢れた国際開発”が本当に途上国に幸せをもたらすのだろうか、と。現地で実際にメキシコの人々のありのままの生活、曇りの無い笑顔を見て、私はその考えが必ずしも途上国の笑顔につながるわけではない、と感じました。

このグローバル化が進む世界で、本当にあるべき国際開発、国際機関の形とはなんなのか。途上国の人々が国際協力を求めているとするならば、彼らが心から必要としている国際協力とはどこにあるのか。私たちは、恐らくそれは、国によって、地域によって、そして人によってそれぞれ違うのだと思います。だからこそ、自分たちの目と足で少しでも多くの現地の状況を直に見つめる必要があるのだと実感しました。文



化や言語に関して、この世界に正解は存在しないし、

自国とは異なった文化、言語に触れ、それを理解しようとする、誰の考え方も、どの国の方針も、全てその人、その国なりの背景や意図をもって創られていて、それを個人の考え方に依って拒否したり矯正したりするのではなく、自分の気持ちを付け加えるという形で接することが固い絆を築くために大切な姿勢であるということを知りました。

今年の取り組み

さて、帰国後間もなく一年の総括を兼ねて、ご後援いただいた団体様と一般の参加者の方に活動報告会を行いました。現地で撮影したビデオやスライドショーをもとに、メンバーが感じたこと、来年に向けた抱負を語りました。

今後の活動につきましては、まず数人の新メンバー募集を行ったあとで、講演会、渡航のスケジュールを組み、昨年の反省点を克服したプログラムを練りたいと考えています。具体的には、まず昨年できなかった環境とビジネスのリサーチをプログラムに盛り込みたいと考えています。講演会では網羅していた内容でしたが、現地訪問中は文化や社会についての活動が多くなってしまい、それらの活動を行うことはできませんでした。メキシコでは経済規模が飛躍的に拡大していると同時に、それに伴った環境汚染が今も問題になっています。そのことについて現地での検証活動を行うことが一つの課題として挙げられます。



もう一つは昨年の活動の規模拡大です。メキシコ文化センターの藤原所長、UNAM 高校のキングズ校長は今後も JaM との交流を続け、相互補助の関係を築いていきたいとおっしゃってくれました。その言葉に感謝し、今年はさらに内容の濃い現地交流ができればと考えています。

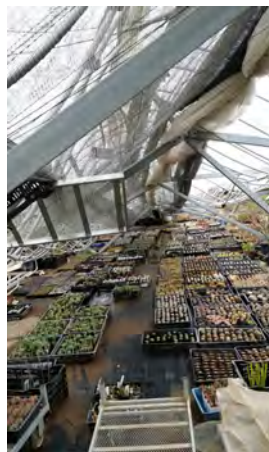
昨年は活動初年度ということもあり、講演会、渡航ともにたくさんの予測不能な事態に見舞われましたが、総じて本当に充実した貴重な人生経験ができた実感しています。関係者の方々及び顧問の畑・早大教授、そして現地のアミーゴたちに心からの感謝を伝えたいと思います。今後とも、よろしく願いいたします。

(了)

【編集部注：執筆は JaM メンバーが分担しました。メキシコ・日本アミーゴ会は日本メキシコ学生会議の活動を「後援」名義を貸与して支援し、2013年11月の事前勉強会では河嶋幹事が元 JETRO メキシコ事務所長として「日本とメキシコのビジネス関係」について解説しました。】

サボテン生産園・群仙園の近況報告

エバーラスティング 蔵野佳好子
群仙園のその後の状況をお知らせ致します。



6月のある土曜日、微力ながらお手伝いできることがないかと、同園を訪れました。豪雪の爪痕はまだ残っていましたが、その中にスタッフたちと共に知恵を出し合いながら努力する島田さんの姿がありました。また豪雪被災農家を支援するボランティアの方たちも訪れており、彼らの作業の仲間に入れてもらいお手伝いしました。彼らは20代～60代の学校の先生やメーカーの工場

勤務されている方、テニスプレーヤー、野菜ソムリエ、大工さんと様々で、可能な限り土日などを使ってボランティアをされているとのこと。和気あいあいとした雰囲気の中、枯れてしまった多肉植物たちの土を植木鉢からあけ、また使えるようにふるいにかける作業を行いました。終わってみて全体の状況から見て、なにか片付いたようには思いませんでしたが、それでもこの地道な作業を各農園の方たちだけで行うのは、本当に気の遠くなる作業だなと感じました。

このようなボランティアの方たちの活動がとても大事だと思い、特に若者たちが中心となってやっていることに、頼もしさと希望を感じました。

島田さんからは、アミーゴ会の応援して下さいと下さった皆さまに今一度お礼を伝えて下さいとのことでした。

【編集部注：群仙園の豪雪被害等に関しては本誌2014年4月号参照。会員の浄財をお届け済み。蔵野編集部員の報告です。】

お知らせ

Fiesta Mexicana 2014 in お台場 Tokyo

今年もお台場がメキシコになる!!

会期：2014年9月13(土)・14(日)・15(祝)日

時間：11:00～19:00

会場：お台場ウエストプロムナード&アクアシティ

HP：<http://www.fiestamexicana-tokyo.com/index.php>



フィエスタ・メヒカーナ@お台場は今年で15周年を迎えます。メキシコ・日本アミーゴ会は協力団体として実行委員会に参加し、日墨交流の輪を広げる楽しさ満載の三日間とすべく準備中です。¡Viva México! をお台場で叫びましょう。

メキシコ写真コンテストの作品を募集中です。

メキシコの自然・人々・風俗、メキシコと日本の交流、日本のメキシコをテーマにした未発表の写真をご希望の方はドシドシお寄せください。応募の締め切りは8月22日(金)です。応募要領はHPでお確かめください。

☆☆毎年8月中旬に横浜赤レンガ倉庫前広場で開催されていた「アレグリア・デ・メヒコ」は今年はお休みです。来年のバージョンアップ復活版をお楽しみに☆☆



iViva! メキシコで日本を踊った!

藝○座 五條珠雀 (ごじょう たまじゃく)



2010年10月16日から23日まで、私共「藝○座(げいまるぞ)～東京藝術大学日本舞踊専攻卒業の舞踊家集団～」は皆様ご存知のセルバンティノー国際芸術祭(グアナファト)にて公演を行って参りました。世界各国からアーティストを集め文化交流を行っている芸術祭も、その年はメキシコとの交流400周年で、日本は招聘国と言うこともあり、「藝○座」は外務省推薦のもと、文化庁から助成金を頂いての、初めての海外公演となりました。

日本舞踊:古典も現代も好評

言葉の壁を越えての海外との予算交渉と企画の練り上げ、一行19名の旅券の手配とビザの申請。何もかもが初めてで不安だらけのスタートとなりました。

先方が我々に求めている作品に対するクオリティと我々が日本を離れて公演を行うという現実のギャップに悩みながらも、国を問わず受入れてもらえるものをテーマに選び、「日本舞踊～古典と現代～」と副題を付けて、古典作品「操三番叟(あやつりさんばそう)」と新作「鳥」の二作品の上演と致しました。

「操三番叟」は動きもさることながら、構成や衣裳の興味も引いたようで好評となり、「鳥」は鴉や雀などの身近な鳥を題材に、津軽三味線・箏曲も加え様々な和楽器の音を使い、オムニバス形式の作品にして上演。途中、国際交流の意味も含め、メキシコ民謡(シェリト・リンド)を三味線音楽に起こして使用したところ、会場が湧き大好評となりました。

まだまだ駆け出しの予算の無い一座の為、公演の為の荷物は全て自分達で運びました。畳んでようやくトランクに押し込めた松羽目(舞台の天井から吊るす布で、大道具の一つ)は37kgで確実に受託手荷物重量オーバー。何とかごねて飛行機に乗せてもらったものの、他に演者が被るかつらも二つ。金属部分がある為、度々荷物検査に引っ掛かり、係員にかつらを見せれば大爆笑され、「this side up」も関係なく、目を離れた隙に横に倒されたりと大騒ぎ。衣裳も小道具も楽器も持ち、渡航者全員がトランク2個ずつとそのほかで計40個の荷物。一つでも無くなれば公演に支障をきたす為、最悪の事も念頭に置き、常に代用品を考えての Packing となりました。ラテンの気質か、先方とのメールのやり取りも中々スムーズに行かない事もあり、メキシコの治安も心配され、作品創りだけではなく他の事でも産みの苦しみを体験致しました。しかし、心配した荷物もなんとか無事我々と共にメキシコに到着し、準備の段階で抱えていた不安は空港まで迎えに来て下さった現地スタッフに会った途端に消え、受入れ体制の素晴らしさに一同感動致しました。



海外公演:メキシコからスペインへ

メキシコは日本よりもかなり標高が高く、酸素が薄いと聞かされておりましたが、稽古を始めてみるとまさに酸欠!過酷でございました。スタッフが用意してくれた舞台袖の酸素ボンベに一同感謝。夜中まで仕込みに奮闘して下さった劇場スタッフの暖かさと熱意、観客の文化に対する興味の深さ、メキシコ政府の文化に取り組む姿勢。全てに刺激される素晴らしい海外公演となりました。

公演前は怖くて挑戦出来ませんでした。打ち上げで飲んだテキーラは充実感も加わり大変美味しくございました。現地の各メディアの取材も受け、新聞・テレビにも取り上げて頂き、貴重な経験と実績作りをさせて頂きました。公演が終わった途端に体調を崩したメンバーもいましたが、大きな事件もなく、最終日にはメキシコシティとテオティワカンでの観光も楽しみ、全員揃って無事帰国することが出来ました。

帰国後メキシコ政府から芸術祭へ参加のお礼と公演の成功を祝う嬉しい手紙を頂きました。準備も旅の間も本当に大変でしたが、今となっては全てが楽しい経験となり、海外公演にハマるきっかけになり、去年はスペイン日本交流400周年の事業にも参加させて頂きました。これからも日本のみならず国際的にも文化交流に努めて行くことの出来る団体でありたいと思っております。(了)

【編集部註:藝○座のHP(<http://www.geimaruzo.com>)には、「1993年、五世花柳芳次郎(現・四世花柳壽輔)の働きかけにより東京藝術大学に初めて日本舞踊科(音楽学部邦楽科・日本舞踊専攻)が設立。卒業生が日本舞踊を幅広い世代に広げ、今までにないエンターテインメント性溢れる舞台を創る事を目指して2006年に藝○座として誕生。日本舞踊という敷居が高い、古臭い、よくわからない…実は、楽しくて、面白くて、美しくて、魅力いっぱいの日本舞踊。その事を幅広い年齢層に伝えたい!そして、お客様と私たちが一つの輪のようにまあるくなりたい!そんな想いを込めて『藝○座』と命名」と記されています。「ダイナミックな和楽器オーケストラによる生演奏と、笑いあり涙ありの躍動感溢れるスタイリッシュな舞踊」は必見!でしょう。】

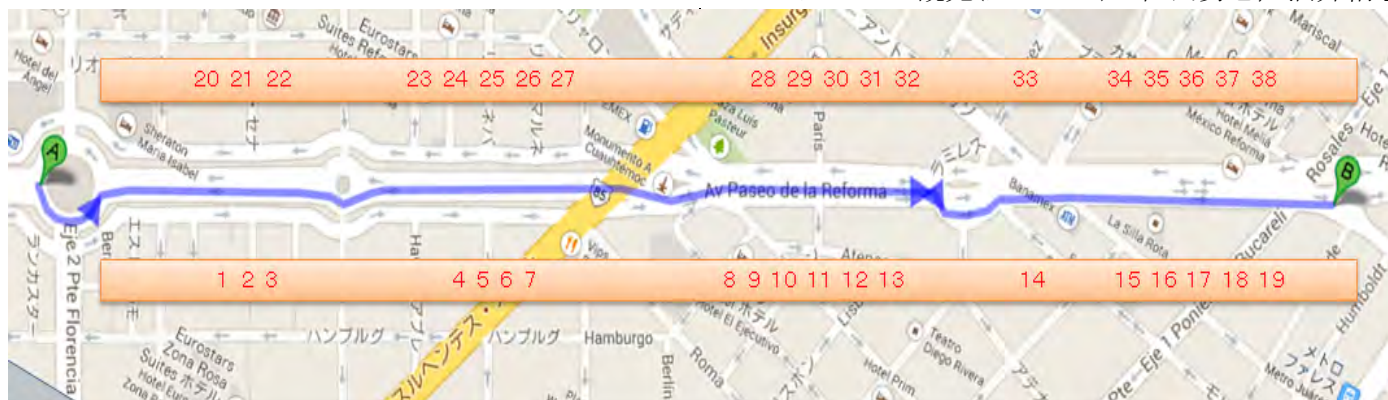


レフォルマに遊ぶ歴史④

～銅像でたどるメキシコ偉人案内～

【編集部注：メキシコで活躍している若いお二人の力作その④をお届けします。通常の旅行ガイドにも載っていない内容で本邦初演とも言えるものです。これであなたも“レフォルマ通”です。筆者は山内さん(チケット課)と酒井さん(ペリカントラベルネットワーク課)です。お楽しみください。】

メキシコ観光(メキシコ) 山内勇志/酒井梢恵



DON MANUEL LOPEZ COTILLA (地図 11)

ドン・マヌエル・ロペス・コティヤ

1800年7月22日、グアダハラハラの裕福な商人の家庭に生まれたが、彼が地元の神学校で哲学を学び始めた矢先に父は他界した。その後、母は再婚しCOTILLAは、継父との生活を余儀なくされた。母の再婚と当時広がり始めていたメキシコ独立へ向けての風潮が生活を困難にし、彼は止む無く哲学の道を諦めることになる。しかし彼の勉学への熱意が消えることはなく、このことが彼の生涯を教育制度の向上に捧げる契機となった。

独立が達成された1821年の時点で、グアダハラハラには私立の小学校が3校しかなかった。1835年まで続くこの教育の遅れを取り戻したのがCOTILLAであった。

勤勉な彼は1828年に初の公的役職である市役所の代表となる。1835年には市議員に就任し、教育委員会を託された。

彼の働きで、同年11月27日には公立小学校設立の条例発布に加え、新たな学習指導要領や教員の手引き、試験制度が確立した。彼の任期2年間で市内に9校、都市周辺に5校、合わせて14校もの学校が新設された。

その後COTILLAは市の顧問として働き始めるが、教育委員会での役目を終えたわけではなかった。1837年8月、初等教育法第1案「州都のみではなく、地方都市までの教育浸透の推進」が交付された。1851年COTILLAは教員養成学校の設立を提案したが、それが実現されることはなかった。しかしそこで諦める彼ではなかった。公の力で実現できないのであれば、自ら教員用教科書を執筆・翻訳をし、実費で出版して教員たちに配ったのである。その中には若かりし頃に彼が学んだ「実践幾何学」や「統計学」に関するものも含まれていた。

20年もの長きに渡ってグアダハラハラの教育制度改善のために奔走したCOTILLAであったが、1855年、病に臥し教育監査の役目を辞することとなった。

1861年10月27日、その生涯を終えた。

現在でもメキシコでは、不幸なことに学校へ通うことのできない子どもたちが存在する。当たり前のように中等教育まで義務化された国に生きてきた私たちだからこそ、何かこの国の教育の力になれることがないか考えてみるきっかけになればと思う。

彼の一番の夢は、教育の無償化であった。

“SIN QUE HAYA PUEBLO POR PEQUEÑO QUE SEA, EN QUE DEJE DE HABER UNA PARA NINOS”

「どんなに小さな村であっても、子どもたちのためには学校がなくてはならない。」



DON FRANCISCO ZARCO (地図 10)

ドン・フランシスコ・サルコ

1829年12月4日ドゥランゴ州に生まれ、地元のMINAS 学園で言語および語法を学んだ。彼は、言語というものを社会科学・法学・神学に結びつけることで、幼い頃から文学的な表現において傑出した能力を発揮していた。後に彼の執筆への熱意と根気強さは、彼を執筆者として大成させた。

1847年、18歳のとき事務局長の仕事を得てケレタロに移住した。ちょうどこの年は、米墨戦争により政府権力が一時ケレタロに移行していた時期であった。若きZARCOはこの特殊な状況に乗じて得た、議会の書記官の仕事を手がかりに、翌年、外務省の事務局長となり活動拠点をメキシコシティに移した。この仕事と平行して、ZARCOの天職となる「新聞記者」の仕事をはじめたのもこの年のことである。

彼は持ち前の文才を発揮し「EL DEMOCRATA」、「LAS COSQUILLAS」、「SIGLO XIX」、「SIGLO」などの新聞社を渡り歩き、要職に就いて数々の功績を残した。しかし、その熱意故に問題を引き起こすこともあった。風刺新聞「LAS COSQUILLAS」へ寄稿していた時期、当時の将軍MARIANO ARISTAが率いる政府を痛烈に批判したことで、後々まで政府に目を付けられることになる。

1854年 Benito Juárez らによる独裁者 SANTA ANA 失墜計画「アユトラの陰謀(*新年号参照)」が達成された時、当時22歳の彼は、その才能を買われユカタン州の議員組合の代表に任命された。

1856年には故郷のドゥランゴでも議員組合の代表を勤めることになる。その立場を利用し、教会と軍閥を廃止して自由主義の国を目指す「改革(レフォルマ)法」の制定に尽力した。

また翌年、メキシコを連邦共和制へ導く為にカトリック教会を公的には認めないこととする「1857年憲法」の編纂事業にも精力的に携わった。ZARCOは、

この憲法制定議会の討議内容を、一晩のうちに正確かつ詳細に報告書として公表した。当時、この速さと正確さを持った執筆を成せたのは、英国の「LONDON TIMES」だけであると言われていた時代に、この偉業を成し遂げたのである。

ZARCO はその後も政府へのクーデターへの反対など政治的な記事を寄稿し続け、このことで再び政府により監視の目が厳しくなったが、運良くその危機を回避し続けるのである。こういった政府の動きも彼の執筆意欲を揺るがせることはなく、ZARCO は新たなペンネームを使い執筆活動を開始する。

1861年に BENITO JUAREZ は、彼を内務省と外務省の大臣に任命するが、その大統領の申し出を拒み、彼は新聞記者の仕事に従事し続ける道を選んだ。

1869年12月29日、ZARCOは信念のままに生き続けた40年という短い人生の幕を閉じたのであった。死後、彼はその時代の最も優秀な新聞記者として国民栄誉賞を与えられ、立法議会の栄誉の壁には金色の文字で名前が刻まれている。彼の出版界および大衆生活に対する貢献は大きく、共和国政府による、民衆における「基本的人権」や「表現の自由」の擁護の姿勢に大きな影響を与えた。

私たち外国人がメキシコで生活するにあたって、彼の求め続けた「表現の自由」や「基本的人権」というものはないもである。先人が残してくれた、「財産」を守っていくのは私たち自身であることを忘れてはいけない。(了)



お知らせ

「藝〇座」の8月公演

日本舞踊家集団の藝〇座(p.7参照)が主催・制作・企画する公演が8月28日(木)、日本橋公会堂で行われます。演目は「大蛇ーオロチ」と「オズの魔法使い」。昼夜2回公演(14時開演と18時開演)で、料金は全席自由の4,000円。問合せはウェブ(<http://www.geimaruza.com>)あるいは☎090-6470-4426(留守電対応)まで。

あとがき：今年は気性の激しい梅雨ですね。会員諸氏にはご健勝にお過ごしのことと拝察します。早くも台風8号の直撃が予報されています。怠りなく準備を進めましょう。御宿町はテカマチャルコ市との姉妹都市提携(本誌2014年1月号既報)を契機に7月12日～8月9日、メキシコから高校・大学生を迎えて学生交流事業を展開します。6月14日には資金援助のチャリティーコンサートが、御宿町民となった黒沼ユリ子さんの出演で盛況裡に開催されました。恒例のリセオ(日墨学院)高校部の日本文化旅行に加えて、日墨の架け橋となる若い世代の育成事業に新しい柱が生まれます。本誌も架け橋たらんと努力します。[140706 か]